

12

2002.5

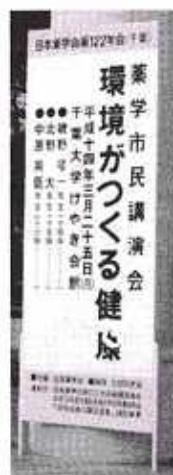
薬友会報

千葉大学薬友会

**2002年！千葉大学大学院薬学研究院は
新たな一步を踏み出しました。**



8,400人の参加者で、大盛會に終わった日本薬学会第122年会！
(3/26-28；千葉・幕張メッセ、幕張プリンスホテル)



市民公開講演会も盛況！



萩庭さく葉標本がミニシンポジウムで発表された



各界からのご来賓がご臨席
日本薬学会年会懇親会

薬友会会長挨拶	2
副学府長・評議員挨拶	2
副学長に聞く	3
新任教授紹介	4
日本薬学会第122年会報告	4
特集（亥鼻移転）	5
千葉大学校友会が設立される	6
小原康治先生のご逝去を悼む	6
支部だより・亥鼻会・ゐのはな山岳会 ・サークル紹介・お知らせ	6・7

研究室紹介	8
クラス通信	9~13
薬友会より	13
学部だより	14
学会賞受賞者・開催学会	14
学位授与者一覧	15
職員の移動	15
生涯セミナー	16
編集後記	16



明治23年(1890)の創立以来百有余年、本学は優れた人材の育成、研究の推進を通じて社会の発展に大きな貢献を果たしてきています。昭和24年(1949)の千葉大学発足、共学の実施、昭和40年(1965)を前後した2学科制・大学院設置、西千葉移転、昭和54年(1979)の博士課程設置、そして21世紀になっての大学院重点化・医学薬学府の発足、亥鼻移転と、本学の発展は日本社会の変化とシンクロナイズしたものであると言えます。今日の発展は、医療システムの拡充強化、創薬・ライフサイエンスの発展という現代社会の要請から発しており、正に「医薬の覇府」たる本学に対する期待の現れであります。

現在全ての大学は、日本の社会構造・産業構造の改革という大難題に対応した、確固たる大学の改革方針・将来構想を持つことが要求されており、こうした動きはこれまでの大学運営と質的に異なるところです。「独立行政法人化」、「大学の再編・統合」、「評価と競争原理の導入」などの言葉が新聞紙上を賑わせていますが、21世紀初頭は歴史に残る大学変革の時期となり、予想をはるかに越えた変化となることでしょう。自律性の拡大、個性輝く活力に富む大学づくりは異論のないところですが、各論において民間のマネジメント手法の導入、競争と評価、任期制・教員の身分などこれから解決しなければならない課題が山積しています。

一方、薬学教育の問題に限れば「薬学6年制」への移行を視野に入れ、「基礎薬学を重視し、薬剤師教育・医療薬学も充実する」という特色ある本学の教育理念を実現する好機を迎えることになります。亥鼻に帰り、新校舎において新しい教育システムを構築できることは、正に「新しい酒を新しい皮袋に盛る」幸運に恵まれたと言えるでしょう。今後一層の薬友会会員の皆様のご支援をお願い申し上げます。

副学府長・評議員挨拶

鈴木 和夫



2002年4月から2年目の副学府長としての役割を担うことになりました。昨年4月、薬学と医学の大学院の教育組織である薬学研究科と医学研究科を統合して、医学薬学府となつてから1年になろうとしています。この間、学府長が指定職となるなど、医学薬学府の役割が将来的にも増しつつあることがわかります。日常的には医学薬学府の中で薬学系と医学系はそれぞれの運営委員会が従来の研究科に代わる役割をしておりますが、この1年間でやっとその形態にも慣れてきました。

大学院の組織が変わったことに伴い、修士課程では1学年あたり100名、博士課程では30名余と院生の数も大幅に増え、教育内容もまた研究に対する院生の気質も変化しつつあります。このような変化の著しい中で、どのような教育を、また研究をすべきか悩むことも多くあります。1年後を考えると、逆に1年前は何を考えていたか考えてみます。1年前に考えていたことと全く違う現在を見ると、余り先のことを思い患うよりも、その時点でそれぞれがベストを尽くすことが最も大切であると思えます。そしてそのベストの選択が未来を決めていくことになるものと信じて、日々動めています。

国立大学も丁度2年後には独立行政法人化する可能性が高く、各大学が独立した事業体としてその目的を果たすことが求められようとしています。これまでの国立大学における評議員の役割に比べて、法人組織となった大学における評議員の役割もより重くなってくるように思います。このような組織の変革期に評議員としての役割を果たすことの重要性を改めて感じています。この間に、薬学は6年制の問題にも取り組まなければなりません。

幸いにも、校舎の新営が始まります。独立行政法人化に辛うじて間に合ったのかなと思われるタイミングです。亥鼻キャンパスの人たちとの融和をはかり、新たな環境に適合するためのすべりの良い歯車になりたいと考えています。



平成6年に千葉大学薬学部へ赴任して以来、教育、研究の改革と発展に、そしてそれを支える組織ならびに設備の改革と改善に、先見性、先導性、確信をもって絶え間ない努力を払って邁進していく薬学部の真摯な姿勢、勇気と活力を深く感じて参りました。ひとときたりとも現状に留まることなく、より優れた教育と研究を目指しての決断と実行、そしてそれを一体となって支える協力態勢、とても素晴らしい本学部の姿勢をいつも実感して参りました。平成9年には医療への貢献、医療薬学の充実を目指して大学院に医療薬学専攻が新設され、今春にはこの課程を修了した最初の博士が誕生しています。平成13年には医学部とともに大学院大学に生まれ変わり、教育組織である医学薬学府ならびに研究組織である薬学研究院が発足し、教育・研究の高度化が図られ、丁度一年が経過しました。そして今、亥鼻地区への移転、研究棟の新営が始動しています。

国立大学の「独立行政法人化」というとてつもなく大きな課題が私たちの目前に横たわっています。いずれにしても大学はこれまでにない変革を遂げることが社会的にも、また大学自体にも必要なことなのだと自覚しております。期待される大学および大学人像に少しでも近づけるよう努力していきたいと思っております。

この度、評議員となりました。その任を果たすために、微力ではありますが最大の努力をする所存であります。どうかよろしくご指導ならびにご支援をお願い申し上げます。

五十嵐一衛副学長に聞く



平成14年4月1日より五十嵐一衛教授が、千葉大学副学長に就任されました。薬学部から千葉大学幹部にご就任されるのは、湊 顕先生、山根靖弘先生、澤井哲夫先生について五十嵐一衛先生が4人目の大役ご就任となります。五十嵐先生に、独立行政法人化を目前にした千葉大学の舵取りについてお聞きしました。

(文責 上野 光一)

—この度は、副学長ご就任おめでとうございます。千葉大学医学部と薬学部が協力して融合し、大学院大学として拠点化された初代の薬学研究院長をご退任された直後に、引き続き副学長にご就任されることになりましたが、千葉大学の副学長制度と五十嵐先生のご担当について簡単にご説明ください。

五十嵐副学長：現在、千葉大学は副学長三人制（学術・教育・情報・渉外）をとっておりまして、私は学術担当の副学長です。

—1991年の大学設置基準の大綱化から本格化した大学改革も、2004年にも予定される大学法人化で一応の区切りがつくと思われますが、その後の千葉大学の在るべき姿について先生のお考えをお聞かせください。

五十嵐副学長：教育・研究をはじめとし、大学運営に関しても目標を設定し、毎年自己評価を行いながら、目標に到達するよう努力することになると思います。各個人の教育・研究に対する評価ができるだけ数値化され、現在に比べ一段と厳しくなると思います。

—そうしますと、薬学部も大きく変わらざるを得ないことになりますが、薬学部の方向性についても先生のお考えをお聞かせください。

五十嵐副学長：大学の基本は教育・研究をしっかりとやることです。日々の努力を怠らなければ、たとえどのような改革が行われようと恐れることはないと思います。しかし今後は社会のニーズに応えるため、基礎研究だけでなく、薬に関する研究の比重が大きく増すと思います。

—成る程、これまで同様、私たちは自信を持って教育と研究に邁進すれば何も恐れることはない、薬学の将来は明るいということでしょうか。

五十嵐副学長：そのとおりだと思います。しかしこれからは象牙の塔に閉じこもっているだけではだめで、社会の動向に気を配りながら、工夫を凝らした教育とオリジナリティーの高い研究を心がけるべきだと思います。

—本日はお忙しい中、貴重なご意見を賜り有り難うございました。先生の益々のご活躍をお祈りいたします。

新任教授紹介



薬品物理化学研究室

根矢 三郎

(昭和50年京都大学工学部卒、
昭和57年京都大学大学院工学研究科
博士課程修了)

2002年4月から薬品物理化学研究室を担当させていただくことになりました。私は京都大学工学部石油化学科の出身者です。米沢貞次郎教授の量子化学研究室にいましたが、理論計算よりも実験に興味があり、学生時代からヘモグロビンなどヘムたんぱく質の構造を分光学的に調べてきました。学位取得後の20年間は、京都薬科大学の薬品物理化学教室にお世話になりました。そのため、私の研究教育の実質的履歴は薬学部にあります。

物理化学は薬剤分子の性質や分析機器の原理を学ぶ重要科目のひとつであり、前任の津田穰教授は物理化学教育に熱意を注がれました。津田先生は生体分子の巧妙な仕組みを電子状態理論にもとづき解明された著名な研究者でもあります。その後を引き継ぐのは大変な重責と、緊張しております。私は津田先生が築かれた研究教育の伝統を発展させる所存でございます。浅学非才の身ではありますが、薬友会の皆さまのご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

〈日本薬学会第122年会報告〉

日本薬学会年会在16年ぶりに千葉で開催されました。年会は平成14年3月26日から28日の3日間、幕張メッセ及びプリンスホテルにて、約8,400名の会員、及び非会員の参加により行われました。内容は、27題の受賞講演(会頭講演含む)、29題の特別講演(内外国人特別講演10題)、42題のシンポジウム、ミニシンポジウム、3117題のポスターによる一般発表から構成されていきました。一般発表は化学系薬学、物理系薬学、生物系薬学、医薬化学、環境・衛生・社会薬学、医療薬科学の6つの領域に分け発表を行いました。なんといっても、最も多くの会員が一般発表に関わりますので、本年会ではポスター発表の最後の時間帯は講演もなくし、ポスター発表における討論の充実を期しました。参加者の皆様にこの試みは好評であったように思います。また、特別講演もシンポジウム、ミニシンポジウムも会場に多くの聴衆が集まり、討論も活発に展開され、年会全体としての企画は成功したように思います。

薬学会をアピールするために、本年会でも市民講演会を前日の25日に千葉大学けやき会館で開催致しました。テーマは「環境がつくる健康」で、多くの聴衆が集まり大変盛況でした。

年会を主催してみて感じたことを以下に記します。まず、学会場の便が良く、予想の上限に近い参加者が集まったことは大変嬉しいことでした。また、本年会は製薬会社によるランチョンセミナーを3日間にわたり企画しました。多くの薬学会員が現在使用されている薬が如何に開発されたかを知ると同時に、薬の作用機作、副作用に関する知識を得、薬学部関係者の薬知らずを改め、薬に関する認識を深めていただく良い機会になったと感じました。シンポジウム、ミニシンポジウムも薬の応用に関するものは多くの参加者による活発な討論がされていきましたし、21世紀の薬学会は薬に直接関わる研究の発表が多くなり、薬の専門家集団による学会の色彩が濃くなっていくのではないかと感じました。

千葉での年会ということで、千葉らしさを演出するために、「宮本高明先生を偲ぶ」というシンポジウムと、「減びゆく薬用植物—今よみがえる萩庭さく葉標本」というミニシンポジウムを企画しました。いずれも大変好評で、千葉の特色が出せたと思っています。予想外だったことは、今後の発展が期待される「ゲノム創薬」を視野に入れるために、かずさDNA研究所並びにインキュベーションセンターの視察を目的とした「かずさアカデミアパークツアー」を企画しましたが、参加者が少ないことでした。宣伝活動をどのように展開するかに関しては課題が残りました。

最後に、年会は成功裡に終了いたしました。これは千葉大学薬学部、東邦大学薬学部、日本大学薬学部諸先生及び学生の皆さんの多大なる努力の賜とします。ここに改めて感謝申し上げます。(文責 五十嵐一衛)



亥 鼻 移 転

昨年度の薬学会報の特集で、薬学部の大学院が2001年度から医学部と一緒にあった新しい医学薬学府に生まれ変わったことを御報告致しました。この医学薬学府の設置により、従来からの基礎薬学の研究の充実と共に、薬の副作用の研究、遺伝子診断、ゲノム創薬等医学薬学の境界領域に活躍できる人材の育成を目指しています。博士課程は3年課程と4年課程の2コースになり、医学領域も研鑽することを希望する人は4年課程に入り学位は医薬学博士となります。医薬学博士の称号は日本で初めて設けられたものであり、この称号が世の中に一日も早く認知されることを希望しています。

この大学院制度の改革に伴い、かねてから希望していた亥鼻地区への建物の移転がついには実現の運びとなりました。亥鼻地区には現在、医学部、附属病院、看護学部、真菌医学研究センターが設置されていますが、ここに薬学部が加わることで、新しいライフサイエンスの一大拠点形成しようとする構想です。

薬学部は亥鼻キャンパスから1966年に西千葉キャンパスに移り、以来皆様方の助けを借りながら、学部として独立独歩で着実に発展して参りました。最近では、1995年には薬用資源教育研究センターを設置して自然界の薬用資源の探索並びにその応用に関する研究を充実させ、1997年には大学院に医療薬学専攻を設けて医療薬学領域を充実させ、薬学の教育・研究の充実を図って参りました。

しかしながら、昨今の学問の急速な進歩に伴い、ライフサイエンスに関わる他学部との共同研究は必要欠くべからざるものになって参りました。更に、従来の薬学部の建物の老朽化、上記薬用資源教育研究センター並びに医療薬学専攻の研究室の新設要求等諸般の事情により、亥鼻キャンパスにおける薬学部の建物の新営が焦眉の急となってきました。しかし、日本経済の歩みは遅々としており、2001年度の建物新営の概算要求は不調に終わり、非常に落胆していたわけですが、幸運にも第2次補正予算で建物新営が認められることになりました。

建物新営の工事は2期に分かれて本年の6月頃から行われますが、場所は医学部本館（旧病院）と真菌医学研究センターの間の旧薬学部跡になります。下図にその完成予想図を示しますが、2棟共に約10,000㎡の9階建ての立派なビルを予定しています。筆者も亥鼻キャンパスに学んだ一人ですが、亥鼻キャンパスで学んだ諸先輩方も感慨ひとしおのことと思います。ただし、建物は総合研究棟という名目で、医学部の数研究室も一緒に入ります。

この移転を機会に、ライフサイエンスに関する研究を医学部、看護学部、真菌医学研究センターと共同して行い、薬学部が大きく飛躍することを目指しています。各学部がお互いに切磋琢磨し、世界の医療の向上に貢献できることを祈念し、教育・研究に励みたいと思っていますので、会員の皆様の御支援を切にお願い申し上げます。

（文責・五十嵐一衛）



〈千葉大学校友会が設立される〉

平成14年3月1日(金)幕張プリンスホールにて、千葉大学校友会設立総会が開催された。当日は2部構成で式が進行し、第1部は「設立総会」と「記念シンポジウム—千葉大学校友会の今後のあり方—」で、第2部は「記念コンサート」と「懇親会」であった。第1部では磯野学長による校友会設立の主旨と伊東副学長による会則等の説明に続き各同窓会代表による校友会設立に対する同窓会の取組等が紹介された。薬学からは立崎副会長が薬友会の現状と校友会への抱負を述べられた。第2部の記念コンサートでは教育学部秋山衛教授の素晴らしいテノール独唱とユーモア溢れるトークをお聴きした後、懇親会で参加者の親交を深めた。関係者が心配していた参加者であるが、予想を越え450名にも達し、急遽椅子を追加するなど式は成功裡に終了した。薬学からは卒業生10名と教職員17名の合計27名の薬友会メンバーが参加したが、連絡上の問題で、一部の卒業生しか案内を差し上げられなかったことをお詫びしたい。

現在千葉大学は、薬学部に加え、文、法経、教育、理、医、看護、工、園芸学部の合計9学部から構成される。各学部には永い伝統を持った同窓会が存在し、それぞれ独自の活動を展開してきているが、この校友会は21世紀を迎え、千葉大学が新しくかつ特徴ある大学としてさらに発展するためには、大学が学部を越えた強い連携を持ち一丸となって進んでいくことが必至であるとの磯野学長の強い意向により今日の設立を迎えた。校友会の今後の課題は、具体的な活動そしてその実効であり、我々薬友会としてはこの校友会にどう取り組んで行くのかが問われている。なお、第2回総会は本年10月5日(土)の予定である。

校友会薬学部幹事 石川 勉



小原康治先生のご逝去を悼む

東京理科大学教授、小原康治先生は国際化学療法学会の帰途、昨年7月5日にロシア・サンクトペテルブルグで脳出血のため急逝されました。享年56歳、働き盛りで理大薬学部にて新研究室を開いたばかりの時に、大変に残念なことです。小原先生は平成12年秋まで4年半に亘り微生物薬品化学研究室内の助教授として教育研究に尽くされました。また、千葉薬学院初期の第4回修士修了生です。薬剤耐性菌の基礎研究で業績を挙げましたが、近年はその生理活性作用が再評価されるマクロライド系抗生物質研究で国外からも注目されていました。この分野、米国の第一人者のPfizer研究所 Dr. J. Sutcliffe が米国微生物学会機関誌 (ASM News) に、海外会員に対しては異例の長文の追悼文を寄せています。快活な性格と玄人の域の釣りを趣味に、国内外に沢山の友人を持ち、学生からも慕われた人でした。本当に惜しい人を失いました。

(澤井哲夫)

支部だより

◎ 神奈川支部

前回の同窓会から2年が経過した昨年は、支部独自の会合は残念ながら(幹事の怠慢による?)開催されませんでした。然しながら、昨年10月7、8日 横浜; パシフィコで日本薬剤師会第34回学術大会が開催されました折、ミニ同窓会を急遽催したところ、南関東の4都県から、山崎賢一氏(15年卒)を始めとし、40年卒までの熟年ばかり17名の会員が集まりました。当日は、小川通孝氏(34年卒)の進行により、各人がそれ

ぞれの思い出を披露し、和やかな雰囲気の中に幕が閉じられました。かくなる次第で、神奈川支部としての同窓会が伸び伸びとなっております。今後なるべく早い時期に開催致したいと思いますのでよろしくお願い致します。

(村瀬 一郎)



◎ 東京支部

平成13年11月9日、日本橋倶楽部に於いて総会を開催した。出席者は52名であった。山本恵司教授より大学の大きな変革の中での近況を伺った。厳しさを感じた。次いで、村瀬誠氏（昭和49年卒）より雨水利用の国際貢献の講演があった。地球上に年間大量に降る雨を問題意識をもって見ると、雨水も貴重な存在となる。国内外での具体的雨水の利用についての話は、大変興味深いものであり、感銘を受けた。次回は平成15年11月頃開催予定です。是非ご出席をお願い致します。

（渡辺 楷）

亥 鼻 会

現在は地図の上でもすっかり様変わりしてしまいましたが、昭和の初期当時の千葉医科大学及び附属病院周辺は亥鼻が丘、亥鼻坂と呼ばれ薬学専門部の校歌にも歌われております。亥鼻会は今年第十八回を迎えるに至りましたが、当初岩城謙太郎先輩の発案で主に日本橋界隈で連絡可能な同窓生を中心に始まり、次第に連絡網も整備され、毎年春秋の2回毎回30名位の出席者で開催されております。会員の平均年齢は最低が70歳にもなるかと思われそうですが、毎回時局に通じた講師をお招きして、終了後はクラスによっては、二次会をなさっておられるようです。精神だけは老いる事無く今後も有意義な会を重ねて行きたいと思っています。

（井上 富夫）

ろのはな山岳会

2001年山行は、1月影信山（高尾）、2月高畑山（道志）、3月鋸山（房総）、4月兜山（甲府）、5月御在所岳・藤原岳（鈴鹿）、6月乙女高原・小橋山（奥秩父）、7月白馬・樽池（北アルプス）、8月蓼科山（茅野）、9月荒船山（南佐久）、10月乾徳山（奥秩父）、11月高水三山（奥多摩）、12月沢口山（寸又峡温泉）でした。月例山行参加は10～19名、平均13.3名、延159名、歩行時間平均5時間、標高差平均657mでした。



年齢構成は1945年卒から1997年卒と広い。下山後温泉で汗を流すことが習慣となっている。山歩きは楽しみと共に、ストレス解消と生活習慣病の予防にもなります。貴方の参加をお待ちします。（塩野谷 博）

サークル紹介

千葉大学東洋医学研究会

東洋医学研究会では、例年東洋医学の基本的な考え方、概念について学んできました。しかし知識だけでは何にもならないと考え、薬学部の学生がほとんどという事から、今年度は、「漢方薬」「生薬」に触れてみよう、というのをテーマに活動を行いました。具体的には、漢方薬は、小建中湯、紫雲膏などを実際に学生の手で作ってみるという事、生薬は、実際に触ってみる、食べれるものは食べてみる、という感じです。そうする事によって今までよりもより一層、生薬、漢方というものを身近に感じられるようになったと思っています。普段の活動や、合宿などで得た友人も、大きな収穫だと言えるでしょう。

2001年度東医研ハウプト 薬学2年 廣田 康一



お知らせ

新会員名簿発行にむけてのお願い

名簿委員会では、平成15年度の新名簿発行に向けて準備を進めております。住所変更や平成11年度版会員名簿の記載内容に誤りがある場合は、連絡カード（名簿綴じ込み）あるいはFAXにて至急ご連絡下さい。

（担当研究室：微生物薬品化学研究室、高屋明子
FAX番号：043-290-2929）
連絡の際には、(1)氏名のふりがな、(2)勤務先のふりがなと電話番号を忘れずにご記入下さるようお願いいたします。人名索引と勤務先別索引をコンピュータにより作成しますので、ふりがなが間違っていると、正しい位置にお名前ができませんのでご注意ください。

研究室紹介

微生物薬品化学研究室



記念すべきミレニアムの春、我が微生物薬品化学研究室は山本友子教授を迎え、新たなるスタートを切りました。現在、薬学研究院唯一の女性教授を筆頭に、友安俊文助教授、高屋明子助手のスタッフ3名と大学院前期課程8名、4年生5名の各々個性的なメンバー16名で構成されています。

本研究室における研究は、「微生物による感染症」を中心テーマに2つの目標をもって展開されています。ひとつは細菌感染と発症のメカニズムを分子レベルで解明すること、さらに感染症治療に欠かせない化学療法剤の作用機序とその耐性メカニズムを解明することです。人類が歴史上死闘を繰り返してきた感染症の解明は容易ではありませんが、この研究に取り組むことにより、薬学・医学の双方に貢献できればと考え毎日研究に取り組んでいます。将来的には私たちの研究成果を、有効なワクチンの開発や新しい抗菌剤のデザインに応用していきたいと考えています。

本研究室を巣立った多くの素晴らしい同門生が、社会で活躍しておられます。本年度は同門生に現研究室へ叱咤激励してもらおうと思い、初代卒業生から現役生まで一同に会した同門会を行います。先輩諸氏のご意見をもとに、さらにアクティビティーの高い研究室を目指したいと思っています。(高屋明子)

分子細胞生物学研究室

分子細胞生物学研究室は、山口直人(教授)、林万喜(助教授)、中村辰之介(助教授)、中山祐治(助手)の職員に加え、大学院博士課程の学生1名、大学院修士課程の学生8名と学部4年生4名で構成されています。本研究室は、平成12年6月1日から故本力名誉教授の後を継いで新しくスタートしたまだ若い研究室です。

本研究室では、分子生物学・生化学・細胞生物学・免疫学・遺伝学などの最新の手法を用いて、細胞増殖などの細胞機能の基礎研究に力を注いでおり、がん治療のための新しい分子標的の探索と遺伝子製剤の創薬を目指しています。

がんは、ヒトが持つ約3万5千個の全遺伝子のうち、1つの遺伝子が変異しただけでは発症せず、1個の細胞内で異なる遺伝子が次々と変異を重ねるとがんになります。変異遺伝子の多くは細胞内シグナル伝達に関わるので、抗がん剤の開発には、シグナル伝達経路の基礎研究がとても大切となります。シグナル伝達経路は情報伝達経路とも呼ばれ、細胞外からのシグナルを細胞の応答に変える情報処理回路のことであり、精密で複雑な電子集積回路ICと似ています。タンパク質をトランジスターやコンデンサーなどに見なし、リン酸・GTP・カルシウムなどの化学物質は電子に例えることができます。細胞増殖、分化・成熟や細胞死は、シグナル伝達によって制御されています。現在、この巧妙な情報伝達ネットワークの一端が明らかにされつつありますが、細胞内の情報の流れは依然としてブラックボックスです。

本研究室では、がん関連遺伝子の仲間、中でもチロシンキナーゼという酵素を介するシグナル伝達に着目して研究を進めています。現在の医薬学分野では、先端生命科学の基盤の習熟がとても重要ですので、21世紀の社会に相応しい薬学教育と最先端の研究を行うよう日々努力を重ねています。薬友会会員の皆様方のご支援ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

(山口 直人)

クラス通信

昭和9年卒業（昭九会）

学校を卒業したのが昭和9年。年月の経つのは早いもので、もう68年にもなる。

名前も第1回の会合を持った時、昇給にこじつけて昭九会とした。

初めの頃は級友が各地に居たので毎年、場所を変えて廻り持ちで幹事をしてクラス会を開いていたが、次第に人生から、おさらばをして行く人が増えて、現在ではクラス会の開催は不可能の状況である。

昨年は茂原市長をやった茂原の吉野君が亡くなられた次第に心細くなって来る始末である。今年も年賀状の来ない友が2、3名あった。消息の不明であるのは残念。

しかし、考えてみれば、お互いに米寿を越えた年になったので、無理からぬことと思っている。

90歳をとうに越えた船橋の川奈部、小樽の堀内、宮城の森、市川の山中、横浜に転居した田島、東京の世田谷に居を移した桜井の諸兄の消息はいただいている。

考えてみると僕等の学生時代はよき時代であった。
(中村 晃蔵)

昭和15年卒業（二六会）

級友には、本年7回目の年男も数名いるが、同級生は17名に減少した。その年男2回目は昭和17年で、多くの友が戦場にいた。小生は南方で転戦していた。そこで思う。節分縁起物のあのヒイラギは、老木になると葉は刺立ちを止め丸くなるものが多いので、人の生きざまに例えられる。確かに周りは、丸くなった。お彼岸には仏壇や墓にお花を供えて、敬虔な祈りの中で、亡き人へご冥福の気持ちを運ぼうよ。

(石丸 正美)

昭和16年3月卒業（一葉会）

平素、向井君と連絡（小林修君5月逝去）現在19名。亥の鼻会（13年4/27・10/27・日本橋クラブにおける昼食会）に今村、木俣、小林、向井、海老澤、5名出席（常連）。二次会は常時近くの喫茶店。

去年は一泊会を果たせず、今年は千葉市内泊の希望により計画中。秋山、稲澤、海老根、大石、大沼、河合、重久、望月、山岸君達から加え10名位を予想。

(海老澤賢一郎)

昭和16年12月卒業（宣葉会）

卒業60周年クラス会を2001年10月に千葉市で開催、海東、君塚、国友、果山、古山、三田、安田、藤井の

8名と長谷川教授の助手の草切さんが参加。古山君の案内で母校あとと連絡道路、弓道場、運動場から千葉県庁展望ロビーを見学。60年たった千葉市を満喫した。健在の15名のクラスメートはどうかお元気で。

(安田 英夫)



昭和17年9月卒業（翠葉会）

クラス会通信を書くにあたり、名簿で現存者を確認致しました。21名で卒業時の約4割です。年令も平均80歳となりました。

職業も開局者以外は卒業しました。

クラス会は毎年開催していますが最近では東京が多くなりました。新潟の丸山君、静岡の杉山君は常連です。私も54歳から幹事をやっていますが、今年中に80歳となります。

人生は長いようで短いとつくづく思います。

(堤 保二郎)

昭和18年9月卒業（丘ノ上）

一昨年沖縄へいった。大宜味村の或る店に立ち寄り、果物などを物色していると、店主が来てここが日本一の長寿村であることをなどを話してくれ、年齢を聞いた後もう20年はもつな！とって阿々大笑。

憎まれっ子、世にはばかるといふからかと聞くと、店主またまた大笑。小生も釣られて大笑い。同じようなことを言っている人が東京にもいるよと言うと蜜柑をもってきて土産にしろよと蜜柑を沢山くれた。

末筆になったが陸軍薬剤中尉有川孟君が昨年7月死去した。冥福を祈る。南無阿彌陀佛。

(新井 久人) 齢80、日々是好日

昭和20年卒業（るつぽ会）

平成13年6月23日恒例のクラス会を新宿中村屋レザミにて開催致しました。ご無沙汰の2名を加え16名参加いたし、楽しい一時を過ごしました。最近のクラス会連絡によると健康に寄る欠席が目立ち気になっておりましたところ、11月14日吉田富佐男会長が職場にて倒れ訃報に接しました。次のクラス会まで会長不在となりますが、横田良男、山本包男にて一時しのぎをさせて頂きます。

(山本 包男)

昭和22年卒業（臥豚会）

①平成12年12月16日 新宿とんかつ三太にて、安藤吉治、遠藤宜一、遠藤英美、尾内源治、岡本光博、佐野怜、西藤弘司、石川敏雄、飯塚敏彦、岡 和夫、関谷泰治、中島良郎、フリッツ・ケストナ、山岸主税、山中 孝、吉田淳恵、塩崎國夫の17名が出席。

②平成13年8月19・20日 山紫水明、風光明媚の長野県駒ヶ根市に行き過ぐる昭和20年8月15日当時の陸軍登戸研究所跡や、宿泊地を訪ねた。参加者は安藤吉治、井出敏夫、石川敏雄、尾内源治、小林富治郎、佐野怜、関 和夫、関谷泰治、中島良郎、山岸主税、塩崎國夫の11名。宿のフロントで養豚場経営者のご一行と間違われたり、小林君持参の8月15日の寄せ書を見たり、元気に長生きを願って乾盃、戦後に区切りをつけた。今回は、小林、中島、井出君にお世話になった。此の報告を書いている時、小松和夫、高橋剛一郎君の訃報が入った。ご冥福を祈る。（塩崎 國夫）

昭和23年卒業

恒例のクラス会を平成13年4月21日に新橋「新橋亭新館」で開催。今回はニュージーランドから萱場君、新潟から長沢君の参加があり、前回より2名多い17名の出席を得て、約3時間ゆっくり歓談。有志による二次会は「神楽坂」。

我々のクラスには今一人の海外永住者（寺田清毅君）がシドニーに居るので、次回のクラス会は早めに連絡をして出席を促したい。



〔出席者氏名〕

青柳舜三、井上富夫、植草茂男、大塚 享、岡田次男、萱場忠一郎、杉本珪之助、塚本義二、友田正司、中西安治、長沢吉男、古川和男、古橋隆宏、三浦清、皆川忠義、安井恒男、渡部吉郎（三浦 清）

昭和24年卒業

平成13年のクラス会は、埼玉県在住者が幹事となって秩父長瀬で15名の参加者を得て行った。お互いに古

希をすぎたので、この機会に最近の級友の様子について、報告をさせていただきます。平成9年に篠崎君、平成11年に萩原君、昨年角間君と石川君、本年9月に渡邊君が亡くなりました。それぞれ親しかった友人にクラスを代表して弔問に行っていました。亡くなった人のご冥福をお祈りすると共に、お互いに健康に留意したいと思います。（崎山 晃正）

昭和25年卒業

平成13年のクラス会は、残菊の香なお芳しき11月12日（月）午後1時から、日本橋のレストラン「たいめいけん」で行われた。場所が日本橋になったのは、交通の便がよいようにとの幹事宮坂兄の計らいからであった。また老人向けにとの配慮から、18種の珍味を少量ずつ盛り合わせたこのレストラン自慢のメニューが選ばれた。今回は10名の出席があったが、この数は現在生存・住所判明者の約40パーセントに当たる。一同この珍味に舌鼓をうちながら、在学当時の思い出や、卒業後の活動、定年後の様々な生活等の話に花が咲き、午後3時半頃まで旧交を暖めた。出席者の話や欠席者の近況報告のハガキから、級友の多くは何らかの老人病を背負っているようで、我々のクラス会にも高齢化の波が押し寄せていることをひとしと感じた。結局「一病息災」を合言葉に、これからも末永く元気でクラス会に出席しようと語り合いながら散会した。

（安田 齊）

昭和26年卒業

昨年の悲報も本年は無く、お互い無事で越年し誠に喜ばしい限りです。本年も既にご連絡の通り、4月10日熱海で恒例の26るのはな会が開催されますが、毎年1回の顔見せですので万障繰り合わせの上、多数の出席を期待します。古希を過ぎての日々、呉々もご自愛を切に祈りつつ。（福島 靖）

昭和29年卒業

21世紀初のクラス会は、平成13年9月8日に行いました。今回は、趣向を変えて帝国ホテル・楠間を使い、総勢17名が参加、欠席の方も含め皆さんお元気でした。

前々から東京以外でも開催したいとの希望が出ていますが良い案が見つからず、いまだ実現していません。

簡単な会でもよいから、年に1度は集まろうと話していました。（世話役：今野、千代、比留間）

昭和31年卒業（千葉薬三一会）

2001年のクラス会は、5月23日に奈良で開催され、薬師寺などを訪れ日本における薬学について勉強した。21名が参加し亥鼻丘をしのいだ。さらに、志摩半島まで足をのばして、御木本真珠開発の苦労を学んだ。年を重ねても「雀百まで踊り忘れず」の気概で、文化の発達に遅れないようにしている。2002年には東京でクラス会を開きたいと思っている。薬学部21世紀におけるさらなる発展を期待している。（星 昭夫）

昭和32年卒業（32会）

昨年8月北海道層雲峡温泉で1泊のクラス会を行いました。パートナー同伴の2組を含めて参加は14名でした。旭川で三浦綾子記念文学館、優良良織工芸館、中原悌二郎記念彫刻美術館などをまわり、銀河・流星の滝を眺め、宿での宴会で旧交を暖めあいました。

来年は地方でのクラス会第3弾として高橋氏が世話をして下さることになっています。その折には大勢で集まりましょう。（小尾 隆）

昭和33年卒業

卒業後44年、その間年1回のクラス会が現在まで綿々と続いていることが、今や私達の自慢の種です。昨年は5月に箱根湯本温泉で開催したところ16名が集まり、遠来の友を交え夜を徹して語り合いました。その時人生における出逢いの妙と味わい深さを改めて感じ、ふとまだ長生きしたいと思ったものでした。今年のクラス会は久しぶりに千葉で行なう予定で、思い出の稲毛、猪之鼻等を巡りながら遠い学生時代を偲ぶことにしています。（鳥居 晃）

昭和34年卒業

今や毎年恒例となったクラス会が2001年4月に神戸で開催され、15名（内1名は奥様同伴）が参加した。神戸となったのは、出身地別持ち回り開催のルールに則ったもので一巡目の最後であった。神戸出身の武田君が主幹事となり、ポートアイランド内のホテルで懇親会、翌日は明石大橋を中心としたツアーに参加して、復興神戸の活力を目の当たりに見ることができた。天候に恵まれ、皆の元気と相俟って楽しい会であった。（神田 昌一）

昭和35年卒業（珊瑚会）

4月14日参加者21名浅草橋に集合し、江戸情緒豊かな屋形船で墨田川を下り、お台場付近までイルミネーションのすばらしい都心の夜景を堪能しながら約2時

間30分、揚げたての天婦羅を賞味し、杯を交わした。来年のクラス会は体が元気で歩ける内に海外旅行でもとの事で、再会を誓い散会した。（前田 亨）



昭和36年卒業

平成13年11月11日『三六会』は、東京ガーデンパレスで開催。箱根、京都、郡上八幡と4年ぶりの東京で参加者22名の最近では最も盛況となりました。台湾から李君、沖縄から大城さん、西宮から林君、大津から馬杉さん、浜松から松下君、上田から斎藤君等21のなつかしい面々にお会いできました。

山崎君が叙勲されたとか、また村上君が、宮田学術賞に続いて今年の3月日本薬学会の学術貢献賞を受賞されます。（赤澤 茂）

昭和37年卒業

昨年、5月26日（土）に池田守男・愛子さんのお世話で、隔年のクラス会を久しぶりに千葉で開催。幕張プリンスホテル46階に26名が集合。天候にも恵まれ、発展する千葉の展望を楽しみながら旧交を暖めました。年齢と共に、話題も健康や家族の話が多くなります。今年は卒業40年の節目を迎えますが、記念クラス会案が出ました。真山武志、星野英雄、加藤 昭の3氏が幹事となり、今秋の開催を企画中です。（澤井 哲夫）

昭和38年卒業（三葉会）

昨春で全員が還暦を迎えましたが、同時に今後より親睦を深める等を目的に「三葉会」を発足させ計画的に諸事業？に取り組んでいく事になりました。今年のクラス会は6月に草津温泉で開催予定ですが、来年は卒業後40周年になりますので少しは盛大にと考えています。ご意見・ご希望等ありましたら、どしどしお寄せ下さい。昨年、大沢晃君が逝去されて物故者は5名となりました。ご冥福をお祈り致します。

皆様も健康には十分留意されますように。

（鷺見 常夫）

昭和40年卒業

5年以上前に鬼怒川温泉でクラス会を開催し、次回幹事も決め20世紀中の再会を誓ったのですが……。この間誰れもが人生第一のゴールへのラストスパートで忙しかったに違いない。もう半数以上が還暦を迎えており、残りも年内には到達しますので、今年こそはと期待していたら、2月下旬に幹事さんからクラス会参加の打診がありました。5月18日東京のとあるレストランにて。その結果は、次号の薬友会報でお伝えしましょう。(平野 武明)

昭和41年卒業

卒後35周年を記念して、天津小湊に一泊旅行('01.6.16~17)。総数：17名、特別企画：亥鼻キャンパス見学(北田光一教授に多謝)、参加者名(迷)言：①来年還暦と言われる度に、「だから何なのさ」と聞き直っています。②今回の幹事さんって意外と綿密な人だったのネ。(注)脚本・演出担当は小野健司氏。

(斉藤 勲)



昭和46年3月卒業

現在、クラスの半数のメールアドレスが判っており相互の連絡などに役立っている。未登録の方は、yamamotk@p.chiba-u.ac.jp まで連絡下さい。この4月から名城大学にて、原田健一氏が教授昇任となり、益々の活躍が期待される。石黒さんはコネチカット、奈田氏は北京、石内(竹内)さんバンクーバーにて頑張っておられる。上原(吉良)さんは、インドネシアから帰国され今度は北国・札幌の地に居られる。

(山本 恵司)

昭和47年卒業

卒業後早や30年！ 私達の娘も、妻と同じ薬品化学(旧)教室に修士課程からお世話になり、今春、某外資系製薬企業に就職する。私も、製薬企業の世界的再編成の巨大なうねりに翻弄されながらも、新薬開発を目指して何とか踏ん張っています。薬学部が来年亥鼻に移転するそうですが、医学部に近くなることで、医療に更に密接に結びついた薬学教育、創薬研究(e.g. ゲノム解析の積極利用など)が可能になり、薬学部の

更なる発展に期待したい。

(新聞 信夫・三喜子)

昭和51年卒業

クラスの皆様、千葉大在学中のご自分の学生証番号が72P〇〇〇〇だったのを覚えていますか？この番号の由来は入学時の西暦19××年で、つまり今年は薬学部に入學して30年目ということです。その受験勉強中になぜかビッグニュースが集中し、札幌冬季オリンピック、浅間山荘事件、高松塚古墳壁画発見等、ありましたね。今年11月には定例のクラス会が開催されるはずで、30年をワープしてあの時の新鮮な気持ちに戻りましょう。(渡辺 敏子)

昭和59年卒業

昭和59年学卒・昭和61年修士卒の同窓会が、平成14年2月23日、新宿で開催されました。実に十数年ぶりでしたが、学生時代に逆戻りして楽しい時間を過ごすことができました。ただ残念なことは、ムードメーカー的存在であった大河原聡君が病魔に倒れ、昨年他界したことです。連絡を取り合わないながらも、皆元気にやっていることを心の拠り所にしていただけたに、この知らせはショックでした。今回の同窓会は、彼が皆を引き合わせてくれたのでしょうか。忙しい我々に、一息つけよ……と。心からご冥福をお祈りいたします。

(三橋 弘明)

昭和61年卒業

オープンしたてのお台場のホテル日航東京で行って以来同級会はしていません。参加が難しい方もいるので同級生のメーリングリストを作って交流を図りたいと思っています。私のパソコンには20名程のアドレスが登録されており、様々な連絡に活用しています。アドレスをお持ちの方、andokentaro@syd.odn.ne.jp にご連絡ください。とは言え、薬学部が西千葉を離れる前に同窓会も開きたいので大学に残る4人の同級の先生方、よろしくお願いします。(安東賢太郎)

平成7年卒業

千葉大を卒業してから7年、「もう？」と思う今日この頃ですが、同期のみんなはどのように感じているのでしょうか。年々疎遠になってきている中、最近結婚やJr.誕生の話などがよく聞こえてきます。海外に飛び出した人がいれば、旅をしている人もいました。

3年後には「卒業10周年同期会」を企画できればいいですね。10年ぶりの再会が実現することを期待しています。(宮山 崇)

平成9年卒業

今年もご結婚&ご出産の話題をお届けします。まずはご結婚から。大石さん、高山さん、竹之内さん、花牟禮さんが結婚いたしました。花牟禮さんは院で同期の外山君とのご結婚です。次はご出産です。井口さんが奈央ちゃんの、岡島さんが美緒ちゃんの、林さんが卓眞君のお母さんとなりました。おめでとう！私も早くみなさまに良いご報告をしたいところですが、残念ながらまだまだです（涙）。そうそう、今年は同窓会やりたいですね。（伊藤 貴夫）

平成14年度4年生

大学生活もついに最後の年となり、各自が自分の進む方向について真剣に考えるようになりました。4年生になり研究室へ配属され、3年間の積み重ねをもとに答えのない問題に取り組んでいくこととなります。これまでとは生活のスタイルが全く変わることに不安もありますが、今まで以上に自ら学んでいく姿勢を持ち、新たな発見をできる喜びを少しでも味わえたら、と考えています。（十河 総子）

薬友会より

平成14年～15年 主な活動予定

- 14年5月 会報12号発行
- 7月 役員会・総会・生涯教育セミナー
- 12月 役員会・常任理事会
- 15年5月 会報13号発行
- 7月 役員会・生涯教育セミナー
- 12月 役員会・常任理事会

平成13年 活動報告

- 3月 新入生入会案内（終身会員132名入会）
- 5月 会報11号発行
- 7月 役員会（35名出席）
第10回千葉大学薬友会生涯教育セミナー開催（千葉大学けやき会館）
「ストレスを癒す」一心と体のコントロール
- 12月 役員会・常任理事会（50名出席）

資金協力のお願い

本会の活動を益々盛んにするために、会員の皆様に終身会員へのご加入とご寄付をお願いしております。

- 1）終身会員。会費2万円。昭和48年に開設。（現在50%加入）会員名簿を無料で配布します。
- 2）寄付（1口2千円から受け付けております）。特に、終身会費が1万円であった皆様のご協力をお願い申し上げます。

3）名簿への広告掲載にも、ご協力の程、宜しく願い申し上げます。

上記いずれのお申し込みも、同封の郵便振込用紙がご利用頂けます。

各種委員会名簿

- 総務委員会 ○千葉 寛、細川 正清、小林カオル
村上 泰興（S36）、野中 浦雄（S42）
矢野 眞吾（前委員長；アドバイザー）
- 財務委員会 ○樹淵 泰宏、伊藤 晃成、
村上 泰興（S36）、野中 浦雄（S42）
上田 志朗（前委員長；アドバイザー）
- 名簿委員会 ○山本 友子、星野 忠次、中山 祐治、
高屋 明子
村上 泰興（S36）、野中 浦雄（S42）
小口 敏夫（前委員長；アドバイザー）
- 事業委員会 ○上田 志朗、村山 俊彦、戸井田敏彦
山形 真一、上原 知也、中村 智徳
大川 幸子（S32）、小川 通孝（S34）
山本 恵司（前委員長；アドバイザー）
- 会報委員会 ○上野 光一、山口 直人、奥山 恵美、
小原 康光、豊田 英尚、鈴木扶美子、
戸塚 裕一、小川 通孝（S34）、
加藤 文男（S47）、角田 範子（S52）
今成登志男（前委員長；アドバイザー）
（○印：委員長）

学部だより

2001年度 卒業生、修了生の進路

学部進学	62名（千葉大学大学院 他）
就職	11名（三共3名 他）
その他	1名（研究生）
修士進学	13名（千葉大学大学院 他）
就職	59名（グラクソ5名、三共4名、万有製薬4名 他）
その他	9名
博士就職	14名
その他	2名

2002年度 薬学部入学者（87名）出身一覧

前期・後期日程入学試験合格者	76名	10名	埼玉県、神奈川県
推薦選抜合格者	10名	4名	茨城県
帰国子女特別選抜合格者	1名	2名	新潟県、静岡県
出身地内訳		1名	山形県、栃木県、群馬県、山梨県、岐阜県、大阪府、岡山県、香川県、愛媛県、福岡県、沖縄県、大検、イギリス（帰国子女）
28名	東京都		
18名	千葉県		

2001年度学会賞等受賞（2001.5—2002.4の期間内に受賞）

受賞年月日	賞 名	受賞者	所 属	受賞業績題目
平成13年5月25日	MHフォーラム懸賞論文・優秀賞	上野 光一	高齢者薬剤学	薬剤師の資質向上のための生涯研修の進め方
平成13年11月20日	メタロチオネイン奨励賞	小原 康光	衛生化学	Negative Regulatory Role of Spl in Metal Responsive Element-mediated Transcriptional Activation
平成14年2月19日	有機合成化学協会・武田薬品工業研究企画賞	有澤 光弘	薬品合成化学	メタセシスを用いる置換キノリン及び置換インドール類の高効率的新規合成法の開発とそれらの応用
平成14年3月22日	千葉大学ベストティチャー賞	上野 光一	高齢者薬剤学	
平成14年3月25日	日本薬学会・学会賞	中川 昌子	元薬品合成化学	生物活性含窒素天然物の全合成研究—新規合成法の開拓から創薬先導化合物の開発まで—
平成14年3月25日	日本薬学会・平成13年度佐藤記念国内賞	柏木 敬子	病態生化学	NMDA受容体（N-methyl-D-aspartate）受容体の構造・機能解析並びに脳機能改善薬の開発

2001年度開催学会（2001.4—2002.4の期間内に開催）

会 期	会 合 名	場 所	代 表 者	所 属
平成13年4月14日	第4回千葉医療薬学シンポジウム	千葉大学けやき会館	矢野 眞吾	薬物治療学ほか
平成13年7月29日	市民と高校生のための公開シンポジウム：身近な植物バイオテクノロジー（日本植物細胞分子生物学会主催）	東京農業大学百周年記念講堂	斉藤 和季	遺伝子資源応用
平成13年7月30日	Regulation and Biotechnology of Sulfur Metabolism in Plants（硫黄代謝の制御とバイオテクノロジー 国際シンポジウム）	東京農業大学	斉藤 和季 ほか	遺伝子資源応用
平成13年11月16日	骨粗鬆症治療の新展開—病態に合わせた薬物治療の選択とモニタリング—	千葉大学けやき会館	上野 光一	高齢者薬剤学
平成13年12月6日～8日	International Workshop on Metabolomics Approach in Plant Functional Genomics in the Post-genome Eras（植物のファンクショナルゲノミクスにおけるメタボロミクスアプローチ 国際ワークショップ）	木更津市かずさアカデミアホール	斉藤 和季	遺伝子資源応用
平成14年3月25日	薬学市民講演会—環境がつくる健康—（日本薬学会主催）	千葉大学けやき会館	千葉大学大学院薬学研究院・日本薬学会第122年会組織委員会	
平成14年3月26日～28日	日本薬学会第122年会	幕張メッセ、幕張プリンスホテル	千葉大学大学院薬学研究院・日本薬学会第122年会組織委員会	
平成14年4月20日	第5回千葉医療薬学シンポジウム	千葉大学けやき会館	矢野 眞吾	薬物治療学ほか

2001年度博士学位授与者一覧

甲号(博士後期課程)

氏名	論文題目
石井 宏明	「PNU-97018及びそのアルコール和物の結晶構造と粉砕による非晶質化」
市川 智丈	「タイ産 <i>Pandanus amaryllifolius</i> 含有新規アルカロイドの化学的研究」
内田 秀春	「海洋産抗腫瘍活性アルカロイドManzamine Aの全合成研究—閉環メタセシスによる含窒素中良環の合成—」
内野 智信	「密封加熱による直鎖アミロースへの薬品包接化メカニズム」
岡本 直樹	「バプアミド類の全合成研究：異常アミノ酸含有環状ヘプタデブシペプチドの合成」
小野 誠	「医薬品の水和挙動に及ぼす脱水温度の影響に関する研究」
小野瀬淳一	「角膜損傷治癒におけるグリコサミノグリカンの変動とその意義」
須藤 浩	「チャボイナモリ (<i>Ophiorrhiza pumila</i>) によるカンプトテシンの生産ならびに <i>Ophiorrhiza</i> 属植物遺伝資源に関する研究」
平野 秀典	「セリンプロテアーゼならびにプロテインキナーゼの作動機構に関する理論的研究」
Amornrut Chaidedgumjorn	「Study on correlation between structure and bioactivity of sulfated polysaccharides (硫酸化多糖の構造と生理活性発現に関する研究)」
磯崎 正尚	「レチノール結合タンパクによる薬剤性肝障害の評価およびその特性に関する研究」
片岡 聡	「インターネット技術および暗号化技術を利用した汎用薬学施設間通信回線の構築と応用」
佐竹 尚子	「医薬品有害反応情報の構築と活用に関する情報学的研究」
陳 世銘	「マウス馬腎腎炎を用いた各種薬剤の抗腎炎作用の評価に関する研究」
山浦 克典	「保険薬局における服薬情報提供の実践と汎用医薬品の適応外使用に関する研究」
吉田 円	「ポリアミンレギュロンによる細胞増殖調節機構の解析」

乙号(論文審査)

氏名	論文題目
(平成13年5月8日)	
Suchada Chutimaworapan	「MODIFICATION OF NIFEDIPINE DISSOLUTION BY SOLID DISPERSION USING POLOXAMERSPOLYVINYLPYRROLIDONEANDAMINOALKYIMETHACRYLATE COPOLYMERS (ボロキサマー、ポリビニルピロリドン、アミノアルキルメタクリレート共重合体を用いた固体分散体によるニフェジピン溶出の改善)」
佐藤 玄	「毒性発現における抱合反応の役割—E2011による肝毒性発現機序の解明—」
川元 博	「新規Opioid Receptor Like 1 (ORL1) 受容体選択的拮抗薬J-113397の創製」
鈴木 達也	「固形剤の造粒、打錠工程における結晶セルロースの機能発現機序に関する研究」
細川 信夫	「制癌活性を有する新規アンサマイシン系抗生物質に関する研究」

(平成13年8月1日)

池田のり子	「微生物の生産する生理活性物質の探索研究」
竹林 幸弘	「新規生物活性ペプチドの探索とNMRによる構造研究」

(平成14年2月28日)

三谷 結明	「紫外線照射による皮膚障害と薬物による防御に関する研究」
松本 理	「ダイオキシン類によるP _g クラス グルタチオンS-トランスフェラーゼの発現機構」
増淵 一直	「新規抗真菌剤の合成と構造活性相関に関する研究—真菌の細胞壁合成酵素阻害剤の開発研究—」

職員の異動 (13. 5. 1~14. 4.30)

平成13年12月1日	平成14年3月31日
荒井 秀 助教授採用(薬品合成化学、名古屋市)	土屋 静子 助手辞職(薬効薬理学)
平成14年3月1日	平成14年4月1日
根岸 悦子 技官採用(高齢者薬理学、千大院・修)	根矢 三郎 教授採用(薬品物理化学、京薬大より)
	平成14年4月1日
	平林 哲也 助手採用(薬効薬理学、東工大院・博)

第11回千葉大学薬学部・薬友会生涯教育セミナー（宮木高明記念セミナー）開催のお知らせ

平成14年度の千葉大学薬学部・薬友会生涯教育セミナーを、千葉大学構内正門脇の大学ホール「けやき会館」にて開催いたします。今年の主題としては「終わりのなき感染症との戦い」を選びました。医療における感染症は、HIVウイルス感染症、慢性C型肝炎、プリオン感染症、薬剤耐性菌等現在においても大きな課題となっております。それぞれの分野の最前線で活躍なさっている先生方より最新の知見と情報を講演いただき有意義な1日を過ごしていただくと信じております。

1) 主題 「終わりのなき感染症との戦い」

2) 演題と講師

薬友会会長挨拶 山本恵司（千葉大学大学院薬学研究院院長）

1. 謎多い病原体プリオン

山本 友子 先生（千葉大学大学院薬学研究院）

2. HIV感染症の実態

菅野 治重 先生（千葉大学大学院医学研究院）

3. 抗HIV薬の最新情報

佐藤 信範 先生（千葉大学大学院薬学研究院）

4. C型肝炎の自然経過と治療

横須賀 収 先生（千葉大学大学院医学研究院）

5. 宮木高明記念セミナー

細菌の生き残り戦略と抗生物質

井上 松久 先生（北里大学医学部）

3) 日時：平成14年7月14日（日）

13：00～17：00 生涯教育セミナー

（宮木高明記念セミナー）

17：00～18：40 ミキサー

4) 場所：千葉大学大学ホール「けやき会館」

ミキサー：同会館内 レストラン コルザ

5) 連絡先：〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学薬友会事業委員会

（担当：上田志朗）

TEL 043-290-2985（上田）、3022（山形）



千葉大学薬友会役員会・総会のお知らせ

日時：平成14年7月14日（日）

役員会・総会：午前10時30分～12時

場所：千葉大学薬学部第2講義室

- 議題：1. 事業報告 2. 会計報告
3. 事業計画 4. 規約の一部改正
5. その他

懇親会は同日開催の生涯教育セミナーのミキサーと合同です。セミナーの方に申込み下さい。

編集後記

映画「2001年宇宙の旅」を初めて観たのは何十年前であっただろうか。人類への想像—人類の起源、宇宙との創造的な出会い、そして未来への測り知れない可能性への想像—の限りをつくしたこの映画から、21世紀の衝撃的な幕明けに立ち会えたらいいなと願っていた。東西冷戦は終焉したが、民族対立や宗教対立は益々先鋭化している。日本経済の回復は遅々として進まず、失われた10年はもう直失われた15年にもなろうとしている。このような状況で迎えた21世紀ではあったが、我が千葉薬は医学薬学府大学院重点化、亥鼻移転・校舎新営、日本薬学会第122年会の成功と着実な歩みを続けている。山本薬学研究院院長や五十嵐副学長のお話にもあるように、「基礎薬学を重視し、薬剤師教育・医療薬学も充実する」千葉薬は大発展の好機を迎えたと言える。その礎となるように、本号の特集を組んだ。教職員一丸となり自信を持って事に臨めば、大学改革の急流は容易に乗り切れるであろう。

会報委員

上野光一（委員長）、山口直人、奥山恵美、小椋康光、豊田英尚、鈴木美美子、戸塚裕一、小川通孝（S34）、加藤文男（S47）、角田範子（S52）、今成登志男（前委員長：アドバイザー）